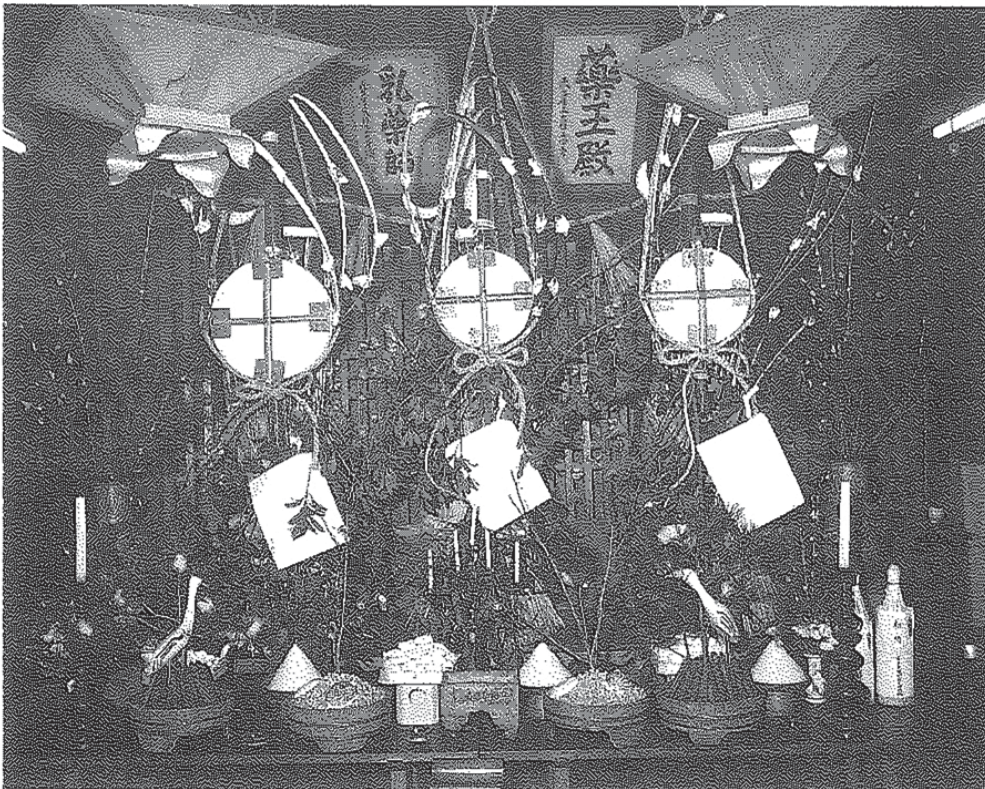


# 甲賀のオコナイ

オコナイは新年または春の初めに行なう農事祈願のまつりですが、県内においては湖北地域に集中してみられる行事といわれます。ところが実際には湖南地域、特に甲賀郡において1月の中旬ごろをピークに、オコナイが盛んです。もちろんオコナイといっても、湖北地域と甲賀郡では内容にかなりの違いがあります。よく前者は神社を中心としたもの、後者は寺を中心としたものと分類されますが、実際は混じりあって行事が行なわれているのをよくみます。ただオコナイを構成する諸要素（精進潔斎・鏡餅・造花・大声を出して床を踏む、たたく・牛玉宝印・トウヤの受けわたし）を仏教の修正会・修二会の内容と比較すると、湖北のオコナイより、甲賀のオコナ

イの方がそれに近いとはいええるでしょう。そして、湖北のオコナイは嚴重なトウヤの受けわたしの儀など村の組織と深く関わっていると思われま。とはいっても、湖北のオコナイの中でも村によっては、甲賀のオコナイと類似する行事をするところも多くあり（高月町高月の弓うち、木之本町木之本の造花ほか）断言はできません。また、修正会・修二会そのものも民間でおこなわれていた年頭の農事祈願などをとり込んで法会化したものですから、村によっては、仏教以前の民俗行事をオコナイに色濃く残していても当然といえます。このことについては、中沢成晃氏が同シリーズ「湖北のオコナイ」VOL.38でのべられていますので参照下さい。



甲南町市原薬師堂オコナイの供え物

さて、甲賀郡のオコナイの中で代表的なものをいくつか紹介してみたいと思います。

## 甲南町市原の薬師堂オコナイ

市原は世帯数40数戸、米作り主体の農業地域です。オコナイは天台宗浄正寺の薬師堂で1月13日につとめられますが、本尊薬師如来は俗に乳薬師ともよばれ、近在の信仰を集めています。

オコナイの準備は

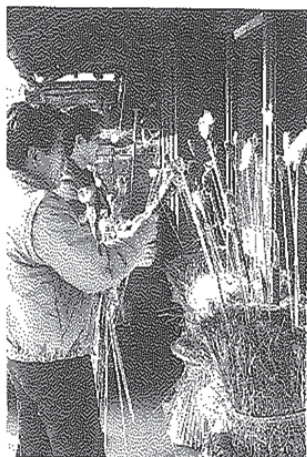
1月11日、早朝、勤頭仲間で定めたヤドに集まり、お供えの餅や飾りを作ることから始まります。餅は左頭餅・右頭餅・酒頭餅の三つで、鍵形をした檜の木にシキビとくくりつけ、かけられることから掛け餅とよばれます。また日の餅・月の餅・花ピラ餅・菱餅も作ります。

飾りは底部51cm、高さ82cmのワラタバにソバガラを混ぜたもの（セコとよぶ）に、小芋で作った子どもの顔やデンデン太鼓、大根で作ったサイコロなどをつけた竹串を刺します。オコナイの日には、日の餅・月の餅・小餅の串ざしも加えます。そうして出来上がった状態をドンガラとよび、勤頭の数（3つ）だけ作ります。

15日はオコナイの日で、勤頭だけは薬師堂に早くから集まり、餅を掛けたり、ドンガラを飾ったり、穂の餅を作ったりします。穂の餅は、長さ4mぐらいの女竹の先を3つ割り

にし、楕円に曲げ、焼いた餅をくっつけたものです。柄は祭壇の扉のすき間にはめ込み、掛け餅の背後から出るように見せます。そのころ年行事の家では当番の2人が寄って、ごぼう盛2杯・豆盛2杯を作っています。ごぼう盛とは、たたきごぼうに松を立て鶴をあしらったもの、豆盛は、むした大豆に梅の木を立て亀をあしらったもの、どちらも大変めたいものです。

午後3時ごろ、2本の藤の木を手に村の人たちが薬師堂に集まってきます。そして堂内に切ってあるイロリの上座から、頼守・法印・区長・長老と坐ります。そのあとに中座・下座と続き、狭いお堂の中はいっぱいになります。頼守とは、1年間のいわば堂守りで肉食をさげ、毎月1日には水垢離をとります。オコナイの権威はこの頼守にありますが、実際の進行は天台宗の法印（住職）が行なうわけです。さて区長のあいさつののち、頼守が



勤頭仲間でドンガラをつくる



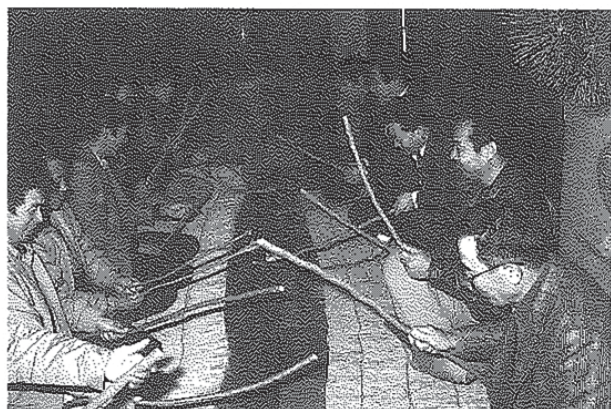
お鏡にシキビをつける



年行事が膳の鶴をつくる



法印が般若心経を読む



藤の木で床をうつ

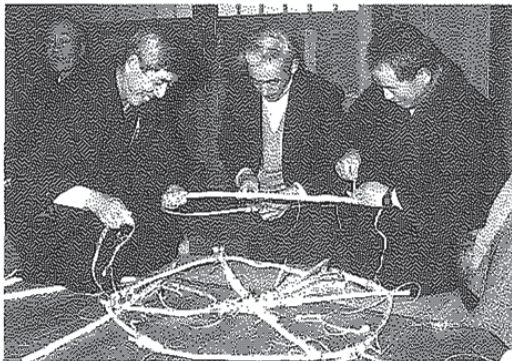
(甲南町市原)

木鉢にベッコウを立てて供えます。ベッコウとは約18cmぐらいの木製の男根で、木鉢の中には酒で練った赤土が入っています。

法印の三礼、般若心経読誦が終れば、左頭・右頭・酒頭の順で、受ける餅の名と数および受ける人の名を読み上げます。この人を請頭とよびます。直後「ダイジョウ」という法印の声とともに、持ってきた藤の木で耳をつんざかんばかりに床をたたきます。そのあと藤の木の皮をはぎ、数本を合わせて輪を作ります。一段落つくと初献の盃、肴は豆盛です。その途中、先ほど作った藤の輪を転がし合います。藤の輪転がしがすむと、ごぼう盛りで二献目です。頼守はその最中、ベッコウの茎に赤土をつけ、掛け餅に①の記号を書いています。書き終ると法印がベッコウをとり、頼守のつむじへ朱を押しします。次は頼守から法印へ、あとは村の人たちがベッコウを受ける番です。ベッコウが一段落すると、長老が

次年度の請人を読み上げます。このあと再び頼守が呪文を唱えながら、ベッコウを手に薬師本尊の向って右手の柱の高いところに朱を塗りつけようとしませんが、それを阻もうとして若い衆が押し倒すように飛びつきます。左手の柱でも同じことが繰り返されます。この朱のつけられた位置によって、早稲・中稲・晩稲の作柄が占われます。年占のあと、年行事が掛け餅をはずし、餅を風呂敷で丁寧に包みます。そして餅の引っぱり合い、餅を取ろうとする者、渡すまいとする者の間で三度、繰り返されます。これがすむと、掛け餅はそれぞれの請頭の家へ持ち帰られます。最後に、ドンガラの日の餅・月の餅は長老衆へ、花ピラ餅はそれぞれに分配して解散します。

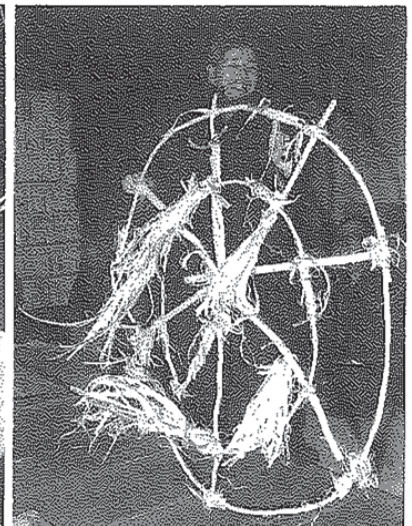
さて甲賀郡のオコナイをもう少しみてみましょう。石部町西寺では1月15日、村の入口に蛇繩を吊り、天台宗常楽寺の本堂の前で弓射ちをしたあと、鬼追いをします。甲賀町滝



藤の木をよせて輪をつくる



一献目の豆盛



藤の輪をころがす



頼守がベッコウで朱をおす



掛け餅をとり合う  
(甲南町市原)



請人がそれぞれ掛け餅を持ち帰る

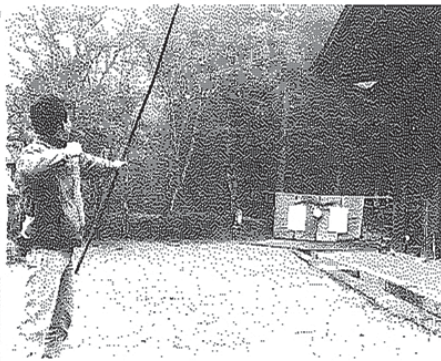
では頭主が羽織袴姿で提灯を持ち、母親が2才になる子をおぶって続きます。母親の持つカゴの中には豆腐が1丁、その上にはお味噌がのっています。うしろには桶に入った飾り餅が2人にかつがれ、大きな竹の笹に餅をつけた成花が続きます。途中、村の人たちと酒をくみ交わしながら、「エート、エート」のかけ声とともに、天台宗龍福寺の薬師さんまで練り歩きます。甲南町深川では1月17日、天台宗浄福寺に観音講員が集まって鏡餅一重ねを供えてオコナイをしています。この鏡餅を下げる際、「エート、エート」と掛け声をかけます。ここは、永禄8年(1565)から明治に至るまでの貴重なオコナイ関係文書が伝わっていることでも知られています。水口町松尾では、薬師(1月8日)、観音(1月17日)、八幡

(2月9日、ただし63年は2月7日)とそれぞれ日を異にしてオコナイがされています。珍しいことに、鏡餅の上には大根と米の粉で作った可愛いダルマがのっています。

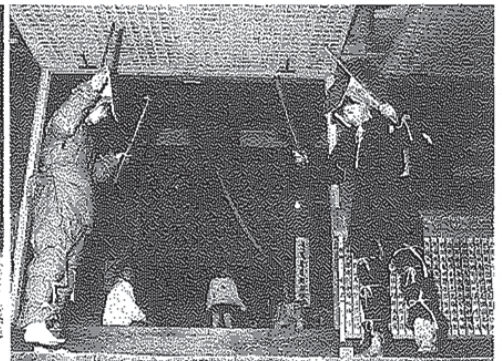
以上、甲賀郡のオコナイをいくつか紹介してきましたが、これはほんの一部にすぎません。また本号では報告できませんでしたが、栗太郡栗東町では、山の神行事をオコナイとよぶところが多く、守山市浮気や、勝部の火祭もそう呼んでいます。もちろん、オコナイという呼び名から考えるだけでなく、行事内容から推察していくことが必要です。ともあれ県内で、湖北地域と湖南地域に集中的にオコナイがみられるというのは、伝統文化の残存の型をみる上でもきわめて興味深い事例といえます。(中島 誠一氏 提供)



吊られた蛇縄の下でお勤めをする(石部町西寺)



弓うち(石部町西寺)



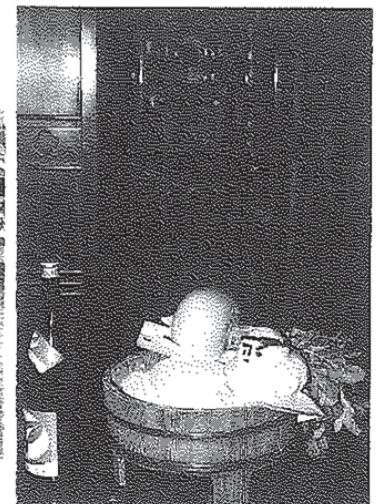
鬼追い(石部町西寺)



エート、エートと声をかけながらすすむ(甲賀町滝)



餅を下げる(甲南町深川)



ダルマののったお鏡(水口町松尾)